



太陽や月の光を受けて、
そっと水面に映り込む逆さ桜。
その幻想的で儚^{はかな}な姿は、
私たちの心を静かに癒します。
写真家・切畑利章さんが捉えた
「水鏡^{すいきよう}の桜」を巡る旅——。

写真・解説=切畑利章
Kirihata Toshiaki

一度は見たい！

気高き春、 水鏡の桜

きりはた としあき／写真家。和歌山県生まれ。人物写真家、料理写真家のアシスタントを経て27歳でフリーになる。コマーシャルフォト、雑誌、PR誌を中心に活動するかたわら、40年以上にわたり桜を撮影。毎春、桜を求めて全国を旅する。写真集に『桜狩』（新宿書房）など。

三多気^{み た け}の桜 三重県津市

一般的に桜並木といえばソメイヨシノですが、ここは大変珍しいヤマザクラの並木です。伊勢本街道から真福院〈しんぶくいん〉への参道沿いに連なっています。この写真は参道の脇にある棚田から撮影。田に張られた水に映る逆さ桜が見応え抜群です。また、周辺には藁葺き屋根の民家など、古き良き日本の山里の景観が今も残っています。桜を見ながらハイキングすると、とても楽しいエリアです。

☎ 059-246-9020 (津市観光協会)

📍 三重県津市美杉町三多気204



小田原城の桜 神奈川県小田原市

明治時代から主にソメイヨシノが全国のお城の周りに植樹されるようになりました。小田原城には毎年通っていますが、これは二の丸の桜並木をお堀端通りから撮ったもの。お城と桜は定番の組み合わせですが、やはり華やかですし、日本人が好きな景色だと思います。

☎ 0465-23-1373 (小田原城総合管理事務所)
 所 神奈川県小田原市内

たや 田屋の一本桜 山形県金山町

今では有名な桜の名所になりましたが、元々地元の方が守り、一部の写真愛好家に愛でられていました。小さなため池の堤に咲くシダレザクラで、樹齢100年といわれています。わりと小ぶりですが、濃い紅色の花びらがきれいです。たおやかで艶やかなシダレザクラ本来の魅力をよくそなえています。

☎ 0233-52-2111 (金山町観光協会)
 所 山形県最上郡金山町金山



特集

京都

タイルと建築、 百年の物語

KYOTO
TAIZAN

深い葡萄色のモザイクタイル（50平方センチ以下の小さなタイル）に上品なレリーフタイル、温かな風合いの布目タイル……。これらはすべて、京都が誇る美術タイル「泰山タイル」（25頁）。「KYOTO TAIZAN」の力強い書体が、その矜持を感じさせる

旅人

倉方俊輔

Kuraikata Shunsuke

中村裕太

Nakamura Yuta

文＝橋本裕子

Hashimoto Yuko

写真＝荒井孝治

Arai Koji

レトロなビルのファサードや

銭湯の浴場を飾る「タイル」。

どこかノスタルジックな趣のある

この言葉が使われはじめたのは、

ちょうど100年前のことでした。

折しも、生活の西洋化にともない隆盛した

洋風建築の構造体が煉瓦から

鉄筋コンクリートに代わり、

タイルの需要が高まった時代です。

近代建築の宝庫・京都を歩きながら、

タイル建築の今までとこれから、

その百年の物語に思いをはせます。

京都、 タイル探偵逍遥記

「一張羅」から「普段着」までタイル建築を求めて、
いざ京都の街へ——みやこを走る大路小路をふたりの
タイル探偵がそぞろ歩きます。いよつ、名コンビ！

京都が生んだ美術タイル

「泰山タイル」の宝庫

先斗町歌舞練場

明治から昭和時代にかけて活躍した小説家・谷崎潤一郎は随筆『陰翳礼讃』のなかで、タイルを痛烈に腐している。曰く「ケバケバしい」「風雅」や「花鳥風月」とは全く縁が切れてしまう」などと、散々な言いようである。文豪に楯つく気はないが、京都・鴨川右岸にある先斗町歌舞練場の建物を前を見ると、谷崎先生に文句のひとつも言いたくなる。なにしろ目の前の建物は、タイルを外壁全面に使っているのに、格式さえ感じさせる落ち着いた佇まいだからだ。「まあまあ（笑）。谷崎が『ケバケバしい』

と断じたのは、屋内の水回りに使われた白い内装タイルのこと。先斗町歌舞練場の外装に使われている泰山タイルとは、目的も用途も違いますから」

そう教えてくれたのは、美術家の中村裕太さん。陶磁器やタイルなどの学術研究とともに、広く創作活動に取り組んでいる。「外壁のスクラッチタイルがいい味を出していますね。スクラッチタイルとは、櫛のように釘を1列に並べた道具で引っ搔いて模様をつけたもの。アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが設計した東京の旧帝国ホテル（1923＝大正12年竣工）で使われ、注目を浴びました。石や煉瓦に似た重厚さを醸し出しながら、どこかやわらかい。さすが泰山タイル（25頁）ですよ」
こう評するのは、日本の近現代建築を専



〔右〕「鴨川をどり」の看板が目を引く先斗町歌舞練場の正面玄関 〔左上〕なまこ壁を思わせる腰壁部分には、赤茶色の花文レリーフと布目のタイルが交互に貼られている 〔左下〕建物全体を覆うのは横長のスクラッチタイル

門とする建築史家の倉方俊輔さんだ。「タイルは石や木、煉瓦に擬態する建材だということがよくわかります」と中村さんが言葉をつないだ。この日「はじめまして」の挨拶を交わしたばかりの中村さんと倉方さん。すでに息はびつたりである。



先斗町歌舞練場へ向かう道すがら、小さな店が軒を並べる路地で建物ウォッチング中の倉方さんと中村さん。タイルが至るところに見られる京都の街はどこを歩いても楽しい



[上右] 1928ビルの屋上から、京都市街を見渡す倉方さんと中村さん [上左] アンデパンダンの床のモザイクタイルはリノベーションの際に地元の美大生が手がけた作品 [下右] かつての趣を残した内装は廃墟ファンにも人気だとか。丸柱のタイルは真近で見るとこの味わい (下中) [下左] アンデパンダンの名物バエリアとカクテル

法。かしこまらない雰囲気なので、ふらりと店の扉を開けたくなる。

雅史さんの祖父・初代の邦雄さんはハイカラな趣味人で、店名は日本初の新劇の劇団「築地小劇場」*1からとったそう。

「設計は祖父です。専門家ではありませんでしたが、内装も外装も徹底して自分好みを貫いています。その空間をできる限り変えることなく、守っていきたいですね」と雅史さん。外装や床のタイルが剥がれたり、壁の漆喰が傷んだりすると、おじいさんに倣って雅史さん自ら補修することもあると話してくれた。

「でも、なかなかうまくいかないんです」カウンターの向こうでクシャッと笑いながらそう言う雅史さん。その姿は、おじいさんの「好き」が詰まった店の空気に、よく似合っていた。

新旧のタイルが競演する
レトロモダン建築

1928ビル

旧毎日新聞社京都支局だった「1928ビル」は、築地よりも少しだけ先輩だ。1928（昭和3）年、関西建築界の父と言われる建築家・武田五一の設計で建てられた。70年間新聞社として使われていたが、1998（平成10）年の移転にともないリ



*1 1924（大正13）年、東京築地に創設された、日本最初の新劇専門劇場およびその劇団。西洋の近代演劇の影響を受けた翻訳劇・創作劇を実験的に上演した

*2 [1872～1938] 近代日本を代表する建築家のひとり、20世紀初頭にアール・ヌーヴォーなどの新しい造形を日本に紹介。現在の京都工芸繊維大学、京都大学の建築学科で多くの後進を育成した



【上】中村さんお気に入りのタイルホコラの前で 【下】和製マジョリカタイルがかわいいタイルホコラ。屋根の上で道ゆく人を見守るのは、今年の干支の虎のようだ



ノベーションされ、現在はギャラリーや劇場、カフェが入るアートと文化の発信拠点となっている。

「旧社章を象った星形の窓やバルコニーが特徴的で、当時はこの界隈のランドマークのような存在でした」

ビルに入る「同時代ギャラリー」とカフェ「アンデパンダン」のオーナー高尙赫^{こうしやうかく}さんがカクテルをふるまいながら、説明してくれる。新聞社時代は近隣でいちばん高い建物だったため、屋上の観測所から市民に天気を知らせていたそう。

「これは新しいタイルです。20年ほど前に京都の美大生たちが制作したそうです」と、中村さんが地下1階にあるアンデパンダンの床を指す。一方、壁面や丸柱に貼られているのは、鈍い輝きを放つ建設当時のタイル。廃墟同然だった空間をリノベーションした際、あえて残されたものだ。

おいしいもんには
わけ
理由がある

第40回

素麺発祥の地とされる大神神社の周辺には、素麺専門店も多い。そのひとつ、池利 千寿亭の定番メニュー「冷やし素麺」

文＝土井善晴
Doi Yoshinori
写真＝岡本寿
Okamoto Hisashi



三輪山の神様が見守るふもとで、古くから愛されてきた清らかな素麺を訪ねました

神さぶ地、三輪の素麺

《奈良県桜井市天理市》

『日本書紀』にも名が見える「山辺の道」は、春日山の近くから三輪山に通じる古道で、古代の面影を残す天理駅から桜井駅までの約16キロがハイキングコースとして親しまれている。その途上には古墳が多く、崇神(すじん)天皇陵の横で思わず立ち止まって「ここ、神さんがおるわあ」と土井さん

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別教授。テレビ朝日系「おかずのクッキング」、NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』(新潮社)など著書多数



子供の頃、デパートの最上階の食堂には「お子様ランチ」、「氷スイカ」と並んで、赤いさくらんぼを浮かべた「冷やし素麺」が必ずありました。

私に味噌の発酵のことを詳しく教えてくれたのは、醸造マイスターの故・雲田 實氏。「このうまい酒は俺が作ったなどという気持ちは、強く戒めなければならぬ」というのが彼の口癖。新潟の三和村(現上越市)で育った彼の子供時代の食べ物の一箱の思い出は、冷やし素麺ではなくて温かい「鶏素麺の澄まし汁」だったそうです。

お祭りの日、鶏を潰して骨ごと包丁で細かく叩き、さらに金槌で根気よく叩いて、ビー玉くらいの鶏団子を作る。湯で溶いただけの味噌汁を布で漉した「味噌澄まし」に、鶏団子を入れて煮て味をととのえ、茹で素麺を加えて、熱々をいただく。何杯もおかわりしてお腹いっぱい、苦しくなるほど食べた、うれしそうに話しておられました。そもそも素麺はお祝いの日の食べ物で、これほど心地よい口当たりの食べ物他になかったそうです。まさに、ツルツル

(鶴)、カメカメ(亀)と縁起がよい。

そういえば、この連載の取材で高知へ行った時、偶然出会ったお祭りの講で、素麺入りの川蟹(モクズガニ)を殻ごと潰した蟹汁をお相伴しました。白く長い素麺は、清く正しく美しい、神様の食べ物。お供えることで、お世話になった人が疫病にかからぬように願ったのです。私たちが、七夕に好んで素麺を食べる習慣は、疫病払いのおまじないにもなっていたようです。

素麺発祥の地へ

今回訪ねたのは、素麺発祥の地と言われる三輪、素麺の里。「三輪」に鎮まる日本最古の神社、大神神社のご神体は三輪山という御山です。

日本の国の始まりと深く関わるこの場所は、かねてより訪ねたいと思っていたところ。山麓の北西に広がる纏向古墳群の盟主の墓とされる箸墓古墳も近くにあります。箸墓古墳ができたと言われる3世紀中頃は、邪馬台国の卑弥呼の死と年代が合うことから、卑弥呼の墓ではないかと言われます。